

活水学院報

# Living Water

わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。  
わたしが与える水はその人の内で泉となり、  
永遠の命に至る水がおき出る。

Whoever drinks the water I give them will never be thirsty again.  
Indeed, the water I give them will become in them a spring of water  
welling up to eternal life.

vol. 121

May 2025



《特集》  
看護学科の新たな使命

全国を目指す大学サッカー部  
離島を活性化！りのみプロジェクト

# Living Water

Living Waterは、活水学院での学びや学生・生徒たちの成長、卒業生のその後の活躍などを伝える広報誌です。教育の現場のいまが伝わる一冊、地域や社会とつながる学院の姿をご覧ください。



## CONTENTS

《特集》愛と祈りに満ちた看護

### 2 看護学科の新たな使命

全国を目指す大学サッカー部

### 5 「好き」を原動力に一步ずつ全国へ

### 6 離島を活性化!りのみプロジェクト



### 7 活水TOPICS

- きのみやはる さん(九州芸術祭文学賞 最優秀作 受賞)
- ひとのための教育
- 2025年度入学式「新たな物語の始まり」



### 9 High school

- 貧困を支援 ケニアへボランティア活動



### 10 Hello 研究室

### 11 Alumni

### 13 KWASSUI OG NOW

### 14 my memory

- 中条先生 × 高月先生



聖句は巻末に綴られています

活水学院報題字 | 藤原 朱石



《特集》

愛と祈りに満ちた看護

## 看護学科の 新たな使命

2025年春、活水女子大学看護学部は、その歴史に新たな一步を刻みました。学院創立以来初めて男子を受け入れました。その背景には社会の要請、特に地域社会に応えた「新たな使命」の確認と、活水建学の精神の変わらぬ理想の追求と変化する現実社会との豊かな対話があります。



時に楽しく、時に真剣に。日々高め合う学生たち

XXXXXXXXXXXX

# 「愛と祈りに満ちた看護」 創立以来初の男女共学へ

## 建学精神の現代的展開

活水学院は1879年、女性に対する高等教育の機会がほぼ存在しなかった時代に、「女子に最高の教育を」というキリスト教の普遍的精神のもとに創立されました。この精神は、その時々時代の沿った女子教育をめざしてきました。しかしそれは、聖書の目指す救いが男女を問わないのと同様、神の人への愛とその結果としての人間の尊厳また可能性を育む教育を包摂するものでもあります。看護に志を抱く若者たちに、最高の教育機会を提供することは、この精神を性別を問わず新たなかたちで実現する挑戦に他なりません。

## 多様性と専門性を育む看護教育

看護とは、神が人間一人一人に与えた尊い命と向き合い、時間を共有する営みです。その担い手に求められるのは、専門的な知識・技術に加え、他者への深い共感と倫理的判断力です。そして社会がそうであるように、多様な背景や視点を持つ学生が集うことで、より豊かで

包括的なケアの学びが育まれます。

活水女子大学看護学部の前身は、長崎医療センター附属看護学校です。看護学校当時は男女共学でした。そこでは男子の教育もなされてきました。現在の実習先では実習だけでなく施設設備も含め、男子の受け入れに支障はありません。また男子看護職の育成の「再開」を求める看護学部からの要望が繰り返し寄せられていました。特に2018年に着任された野口静子前学部長からは、地域医療機関からの要望と共に、看護学部として男子の入学受け入れ要望が毎年、院長に寄せられてきました。そして、看護学部が関係する長崎県病院企業団や国立病院機構長崎医療センターとも協議を続け、2025年4月に男子受け入れが実現いたしました。

学内については2024年5月の学長による学生説明会では学生の反応は「迎え入れる雰囲気十分」であり、外部広報には「教職員が高校訪問やオープンキャンパスに一体となって取り組んだ」

と野口前学部長は当時の学内の盛り上がりを取り返っています。

これまで看護学部は国立病院機構長崎医療センターに隣接する立地条件を活かし、地域の中核医療機関との連携による実習を含め実践的教育を行い、また国家試験合格率も毎年の全国平均を優に超える実績を積み重ねてきました。看護学部の教職員の真摯な指導と学生の努力の結晶であり大きな喜びです。基礎・成人・高齢者・母性・小児・精神・地域在宅の7領域に加え、がん看護、緩和ケア、災害看護、国際保健といった新たな課題に対応するカリキュラムも充実し、さらに3年次からの保健師選択コースや、卒業後の助産師課程・大学院進学支援など、多様なキャリアパスを実現する体制が整えられています。

## 卒業生に受け継がれる活水の精神

本学看護学部で学び巣立った卒業生は、長崎県内だけでなく全国の医療現場でその実力と精神性を発揮しています。

ある卒業生は、国立病院機構長崎医療センターで勤務し、がん患者に寄り添う緩和ケアに従事しています。「活水で学んだのは、技術だけでなく、人の痛みを傾ける心でした。患者さんと家族の小さな声に気づき、それを看護に活かすこと。それが私にとっての祈りの看護です」と語っています。また地域包括支援センターで保健師として活動している別の卒業生は、高齢者や障がいのある方々を支える中で、「看護とは単なる医療行為ではなく、誰かの尊厳を守る営みである」と痛感したといいます。活水で学んだ水を独り占めにしない、分かち合う愛の精神が、日々の活動の支えになっていると彼女は言葉を継ぎました。

「愛と祈り」とは毎週の礼拝で学生が讃美歌を歌い、聖書の言葉から得られる現実です。その「愛と祈りに満ちた看護」はすぐにはなくとも卒業して後、活水建学の精神を社会に静かに、しかし確かに広げ続けていると感じます。男子学生を迎えた新たな時代においても、

活水学院の教育が学生に豊かに受け継がれていくことを心から期待しています。

## 愛と祈りに満ちた看護の継承と発信

活水の看護教育の根底には、キリスト教に基づく「隣人愛」、そして「愛と祈り」があります。活水創立者のエリザベス・ラッセルと同じ時代に生きた「クリミアの天使」ナイチンゲールはくり返し自身が設立した看護学校卒業式で専門教育を受けた看護とは神の愛を広く伝え、実践する行為であり、同時に命の尊厳と平和への祈りに加え専門知識が必要であると語っています。それは今日でも当時と変わりません。このことは男子看護師にとっても変わることはありません。これからも長崎から生命の尊厳と平和を、未来を担う世代へそして世界へと力強く発信していきます。

理事長・院長  
湯口隆司



## 全国を目指す大学サッカー部

# 「好き」を原動力に 一歩ずつ全国へ

学業と部活の両立を乗り越え自己成長を実現。県内女子選手の憧れの存在を目指して

### 切り替え上手な明るく 真面目なチーム

チームの雰囲気は、全体的に明るく真面目で、オンオフの切り替えができる選手が多いのが特徴です。

活動日は週4回(グラウンド2回、体育館1回、公式戦)で、グラウンド練習は正規サイズの1/4ほどのコートを使って行っています。

このような環境で全国大会を目指すことは、甘く見られるかもしれませんが、選手たちはサッカーが大好きで、学業・部活・大学生活をバランスよくこなしながら、全国大会への挑戦を続けています。そして、充実した4年間を過ごす中で、その先の道を切り拓こうとする姿勢を共有していることが私たちのチームの特徴であり、強みです。

こうした考え方に共感して集まった選手たちだからこそ、オンオフの切り替えも自然にできるのだと思っています。

### 4年間の経験が 自分の力になる

環境面から見ると少しタフな目標に見えますが、そこに挑戦することを楽しめる仲間同士が互いを認め、助け合えること。そして、一人ひとりが内省し、成長していく伸び幅が大きい点は、サッカー部の魅力だと思っています。

今シーズンは、九州インカレ3連覇、全国大会1勝、九州リーグ1部昇格を達成できるよう日々取り組んでいます。これからも、私たちが楽しく挑戦を続けていきます。あたたかい応援をよろしくお願いいたします。

(阿部 麗 サッカー部監督 | 食生活健康学科講師)

#### Q 活水女子大学のサッカー部を選んだ理由を教えてください

チームのスタイルや戦術が自分に合っていたこと、チームの雰囲気が良かったからです。

#### Q サッカーで頑張っていることや学業と両立するために工夫していることがあったら教えてください

サッカーで頑張っていることは、自分の課題を分析して、苦手を注ぐ時間(パス精度・フィジカルなど)を重点的に練習しています。学業と両立するために工夫していることは、メリハリをつけること。学業に集中する時間と、サッカーに全力を注ぐ時間を分けて、どちらもおろそかにしないことで、学業との両立を乗り越えています。

#### Q 部活で得られた経験や高校時代より成長したと思うところを教えてください

大学サッカーを経験して、自分で考えて、行動する力がついたことです。高校時代は指示を待つことが多かったのですが、大学では自発的に行動し、チームのために何ができるかを考えるようになりました。また、仲間とのコミュニケーションの大切さを実感し、プレーだけでなくオフの時間でもチームメイトとの信頼関係を築くことが重要だと学びました。

#### Q 今年の目標を教えてください

個人としての目標は、試合で結果を出すことです。得点・アシスト・守備の貢献など、目に見える形でチームの勝利に貢献したいです。チームとしての目標は、チーム全員でレベルアップし、全国の舞台で戦えるチームになることです。最後まで諦めないチームにすることで、試合の流れに関係なく、90分間戦い抜く強い集団を作りたいです。

ポジション: FW  
生活デザイン学科4年 久保らん河さん



## りのみプロジェクト

# 離島を活性化!

2021年2月に発足したりのみプロジェクトは、活水女子大学の学生と地域・行政・企業が連携し、長崎県を活性化するための活動を行っています。「りのみ」には、自分自身の成長とともに活動する方々にのみりあるものを目指す思いが込められています (櫻本 遥さん | 国際文化学部3年)

### 五島

#### 【体験】 フォトフレーム作り

カラリト五島列島さんでフォトフレーム作り体験を行いました。さまざまな形や種類の貝殻やシグラスなどが用意されていてフレームを好きな色に塗ってからグルーガンを使って貝殻をたくさんつけていきました。最後は撮った写真を入れてもらい、思い出に残る素敵なフォトフレームを作ることができました。

(山口 詩織さん | 国際文化学部4年)

#### 【観光】 半泊

半泊地域では、半泊ビーチや教会、製塩所や蒸溜所など見ることが出来ました。細い山道を抜けると綺麗な景色が広がっており、とても感動したのを覚えています。小さな地域ではありますが、海の音など自然が溢れており、心の落ち着く、五島のいい所が詰まっている場所だと思いました。

(竹内 有結さん | 国際文化学部2年)



### 杵岐

#### 【グルメ】 味処 うめしま

屋敷を産地直営の杵岐牛レストラン「味処 うめしま」でいただきました。うめしまでは牧場直営だからその新鮮で良質な杵岐牛が提供されています。セットや定食など豊富なメニューの中から、今回は焼肉と野菜のセットをいただきました。柔らかくジューシーな杵岐牛に舌がとろけました。

(増富 由さん | 健康生活学部3年)



#### 【体験】 辰ノ島クルージング

辰島クルージングでの遊覧では、船で職員の方による説明を聞きながらエメラルドグリーンに輝く美しく広大な杵岐の海を存分に堪能することができました。デッキからは迫力満点な杵岐の海を目の当たりにでき、自然が作り出した奇石や断崖絶壁のコラボによる絶景は息を呑むほどでした。

(鶴岡 舞さん | 国際文化学部2年)

### 対馬

#### 【体験】 対州そば作り

対馬特産の対州そばは、日本最古の原産に近い品種。体験であい塾「匠」でそば作りを体験しました。そば打ち自体は難しかったものの、丁寧な指導のおかげで楽しく作ることができました。打ち立てのそばの、豊かな風味と強いコシに感動。対州そばならではの美味しさを堪能できる貴重な体験でした。

(崎添 友紀さん | 健康生活学部3年)

#### 【観光】 和多都美神社

対馬にはたくさん神社がありますが、その中でも有名な「和多都美神社」に行ってきました。彦火火出見尊と豊玉姫命を祭る海宮で、古くから龍宮伝説が残っています。一直線に並んだ5本の鳥居のうち2本は海の中に立っており、その景色は竜宮伝説を連想させる神秘的な空間でした。

(本谷 京香さん | 健康生活学部3年)



#### フィールドワークを経て

今回の離島訪問では、自然の美しさや伝統、長い歴史を感じることができました。写真では見たいものを選べますが、実際に訪れることで雰囲気や大きさを実感できます。しかし、その魅力を文章や写真だけで伝えるには限界があると気づきました。今後は動画や住民の方のインタビュー等、工夫を凝らしより魅力的な発信を目指します。りのみは、多くの方に長崎県を訪れてほしいと思っています。今回の活動をふまえながら見るだけで満足してもらおうではなく、「実際に行きたい」と思える情報発信を行っています。

(林 亜優さん | 健康生活学部2025年3月卒)



## 『雨粒のゆくえ』九州芸術祭文学賞の最優秀作に輝く



きのみやはる さん  
高校・大学文学部英語学科  
2011年卒

高校・大学文学部英語学科(2011年卒)のきのみやはるさん(ペンネーム)が、第55回九州芸術祭文学賞において最優秀作に選ばれました。受賞作『雨粒のゆくえ』は、同性の恋人と共に暮らす女性を主人公に、家族や恋人との関係、さらには老いのリアルを瑞々しい筆致で描いた秀作です。作品は『文学界』4月号に掲載されていますのでぜひ手にとってみてください。かつて多忙を理由に執筆を中断したものの、再び挑戦し見事に栄誉をつかみ取られました。「忙しさを言い訳にせず、諦めることなく書き続けた。その積み重ねが、心を満たす喜びへとつながった。

好きなことに夢中になる時間は、私の人生を輝かせてくれるのです」と語られました。卒業後はじめて、懐かしい東山手キャンパスを訪問し、その後グラバー園で開催中の「マಿಸイーツ長崎」を見学。ラッセルケーキの製造・販売を手がける後輩たちとも交流されました。後輩たちには「なにごとにも諦めずに挑戦してほしい」との温かいメッセージを託されました。本学卒業生がこのような素晴らしい賞に輝いたことを誇らしく思います。きのみやさんのさらなる創作活動の充実と、今後の一層のご活躍を心より願っております。

## ひとのための教育 — すべては学生の成長のために



広報戦略部会メンバー

活水学院のスクール・モットー「知恵と生命との泉 — 主イエス・キリスト — に拘(むす)べよ」は、人が生きるために必要な知恵や力を、尽きることのない泉から汲み取るという教育観を象徴しています。創立以来145年にわたり、活水はキリスト教に基づく人格教育と、時代に即した実践的・先進的な学びを両立させてきました。2024年秋に始動した広報戦略部会では、教職員が数か月にわたり討議を重ね、本学の教育の核をあらためて言語化し、「ひとのための教育」という新たなキーワードを創出しました。この言葉には、他者と共に生き、社会

に貢献できる人を育てるという、活水の教育の本質が込められています。この理念を具体化するのが、「リベラルアーツ」「少人数教育」「ゼミの活水」という三本柱からなる“活水スタンダード”です。私たちは常に「学生ファースト」の視点に立ち、学生一人ひとりの可能性と歩みに寄り添い、その成長を全力で支える教育環境を整えています。今こそ、活水ならではの教育の魅力と、そこで育まれる学生の力を、社会に広く発信する。伝統と先進性が共に息づく活水の価値を、より多くの方に届けるため、力強くブランディングを進めてまいります。



## 2025年度入学式 新たな物語の始まり

ここから始まる日々が、あなたらしい実りへとつながる歩みとなりますように。心から応援しています。



# 貧困を支援 ケニアへ ボランティア活動



活水高校3年 竹内 侖

高校1年生ではケニアに、高校2年生ではフィリピンへボランティアに行った竹内さん。実際にどのような活動を行ってきたのか、インタビューしました!



— 今はどんな活動をしてるんですか?

ケニアの低所得地域で貧困家庭を支援するボランティアをしています。2023年8月に現地を訪れ、貧困家庭のお母さんたちに取材をしました。彼女たちの課題解決のためにニワトリをプレゼントしたり、子どもたちには折りたたみ機とライトを寄贈したりしました。2024年8月にはフィリピンにも行き、平和学習部の一員として被爆者の体験を紙芝居で伝えたり、貧困地域の子どもたちと交流したりしました。

— 英語は得意なんですか?

実はそんなに得意じゃないんです。でも、中学の先生に「外国人の友達を作るのが一番だよ」と言われて、海外の人と関わりたい気持ちが強くなりました。その中で『チャイルドドクター・ジャパン』という団体を見つけました。

— どうしてケニアに行くことになったんですか?

『チャイルドドクター・ジャパン』に登録して、最初はオンライン子ども食堂でケニアの子どもたちと交流していました。話すうちに「実際に会って、どんな生活をしているのか知りたい」と思い、団体をお願いしてケニアに行くことになりました。

— 行くとき、不安はなかったですか?

とても不安でした。貧困地域には怖いイメージがあって、現地に行くまで緊張していました。でも、子どもたちが初対面なのに手をつないでくれて、すぐに心をつかまれました。

— ケニアで衝撃を受けたことは?

現地の貧困の現実には衝撃的でした。7人家族が2~5畳の部屋で暮らしていたり、生理用品が買えず学校に行けない子がいたり、高校に進学できない子どもも多くいました。それでも子どもたちは笑顔で、「この子たちを貧困から救いたい」と強く思いました。

— これからどんなことをしていきたいですか?

貧困と教育は深くつながっているので、教育環境を整えることで貧困のループを抜け出せると考えています。現地での経験を活かし、実際に行動できる人になりたいです。そのために語学力や発信力を高め、世界を明るく照らせる存在になれるよう努力していきます!



## Hello研究室 | 文学がひらく、人生という物語の扉



国際文化学部  
古家 敏亮 教授

### 私の研究領域

私の研究分野の一つは、戦前のプロレタリア文学、なかでも長崎県とゆかりの深い佐多稲子の文才を見出した中野重治の文学について研究しています。彼が残した文学テキストを文学理論や現代思想を用いて分析し、その今日的意義を見出すことを目的としています。文学とは時代とともに新たな命を吹き込まれ、新しい価値が付与されると考えます。その役割を果たすのが読者であり、研究者なのです。

もう一つは、村上春樹という現代作家の文学を研究対象としています。彼が描く並行世界は、ひょっとしたら私にとっての可能世界であるかもしれないのです。物語の奥に果てしなく広がる世界に浸ることによって、現実の世界に生きていながら別の時間の流れを体験できます。まさに、文学の力を実感させられます。

### 今こそ文学を読むべき

よく、文学を勉強しても社会では役に立たない、という声を耳にします。本当にそうでしょうか?小説はあくまでも虚構であり、現実世界とは異なります。しかし私は小説の世界に浸り自己の人生と重ね合わせることで、社会に出てから最も大切

なことを学べると確信しています。それは「余白」です。私たち人間にとって本当に必要なものは、人生の余白だと思うのです。余白は自分が自由に使うことができ、自由に書き込むことができます。それは毎日の仕事という四角四面の外側にある、自分だけの自由な空間です。その空間をいかに広げ有効に活用するか。文学という虚構の世界にこそ、ヒントが隠されていると思います。それを否定しないのが人生の豊かさではないでしょうか。

### 余白のある人生を

私は長年培った中高教員の経験を活かして教職の科目も担当しています。日本文化学科は長崎県をはじめ全国の教育界に、文学を語る魅力的な国語科の教員を輩出してきました。来年度、その歴史はひとまずの節目を迎えます。しかし日本文化学科の精神は決して色褪せることなく、昨年度改組した国際文化学科にもしっかりと受け継がれています。これからも新たな舞台で文学を読むことの意義を伝え、たくさんの余白を持ってたくましく生きていける学生たちを育てて行きたいと思います。

### 図書館司書おすすめの本

#### ①「好き」を言語化する技術

推しの素晴らしさを語りたいのに「やばい!」しかでてこない

三宅 香帆 著 / ディスカヴァー・トゥエンティワン

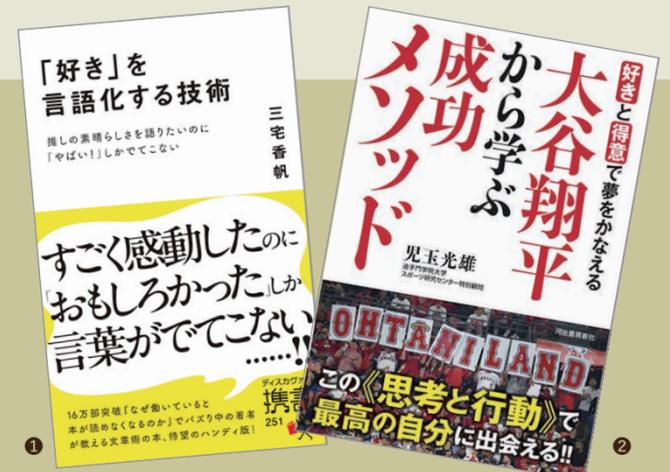
「好き」や「推し」への想いをもっと自分らしい言葉で伝えたい人におすすめ。感情の言語化と伝達の技術を丁寧に解説しています。

#### ② 好きと得意で夢をかなえる

—大谷翔平から学ぶ成功メソッド

児玉 光雄 著 / 河出書房新社

大谷翔平選手の思考や努力の軌跡を通して、「好き」と「得意」を活かした目標達成のヒントを学べます。自分らしい成長を目指す方に読んでもらいたい一冊です。



## ハクモクレンの咲くころ

3月14日(金)、卒業式が執り行われ、223名の卒業生・修了生が学び舎を後にしました。今年は、伝統的な卒業式のスタイルに戻り、入退場のマーチングが復活しました。また、黒のガウンには白い襟が縫い付けられ、これも伝統の復活のひとつです。式に参列した方の中には、整然と入退場する姿に驚いたり、懐かしさを覚えたりした方もいらっしゃったのではないのでしょうか。ようやく、活水平しい卒業式が戻ってきました。

### 【 活水の卒業式とは 】

活水の卒業式の特徴は、厳かな雰囲気の中にある一体感です。学生たちはマーチングのリズムに合わせて入場し、讃美歌や校歌を歌い、伝統の「魂譲り」を行います。それぞれの儀式には意味があり、卒業生としての自覚と誇りを深める時間となっています。

ここでは、普段はあまり知られることのない卒業式の裏側をご紹介します。筆者自身も、卒業式がどのように準備されているのか、ほとんど知りませんでした。



### 【 卒業式前日の風景 】

3月13日(木)、卒業式の前日。学生たちは午前中の卒業チャペルアワーを終え、午後から式の予行練習に励んでいました。マーチングを復活させるにあたり今回特別に指導にあられたのは、元音楽学部長で現同窓会会長の永吉美恵子氏と、同窓会の方々です。永吉会長の専門は「声楽」。校歌の練習では、発声の仕方だけでなく、歌詞に込めら

れた想いや意味を解説しながら、学生たちの心をつつとめました。

入退場の練習では、一列に並んでの着席や、一斉に立ち上がるタイミング、ペアの組み方など、細かな指導が繰り返されました。最初はごこちない動きに、見ている筆者も不安を覚えました。永吉会長は「大切なのは、失敗しても堂々と立ち居振る舞うこと」と笑顔で伝えます。その言葉に励まされ、学生たちは練習を重ね、最終的にはほぼ完成形に近づきました。

### 【 白い襟に込められた想い 】

卒業式で着用する黒いガウンは、卒業生全員分があらかじめサイズごとに整えられています。筆者はその準備過程を初めて知り、特に驚いたのは、ガウンの着丈が2センチ刻みであることでした。

近年、コロナ禍や学生の事情により、かつて行われていた「学生自身が襟を縫い付ける」伝統は途絶えていました。しかし、伝統的なスタイルを復活させるにあたり、この「襟縫い付け問題」をどう解決するかが課題となりました。そんな中、活水の関係者を通じて田浦美恵さんが「私にやらせてください」と申し出てくださいました。美恵さんは御年90歳。なんとお一人で530枚ものガウンの襟を縫い付けるというのです。本来は学生自ら家族や母校への感謝

の気持ちを込め、一針ずつ丁寧に襟を縫い付けるのが伝統でした。後日美恵さんから納められたガウン。その仕上がりは驚くほど美しく、襟のホックまで付け直し、着用時にぴたりと揃うようリメイクまで施されていました。

「卒業生の代わりに、一枚一枚の襟の縫い目に想いを込めてくださったのではないかな」——そう思えるほどの、見事な仕上がりでした。



### 【 卒業生へのエール 】

退場のマーチングで演奏された曲目『Was Gott tut, das ist wohlgetan』(J. Pachelbel)には、オルガニストからのメッセージが込められていました。「どんな困難に遭遇しても、自分を信じて、



その険しい道を突き進んでほしい。」その想いに応えるかのように、卒業生たちは肅々と、そして堂々とした足取りで会場を後にしました。

### 【 ハクモクレンの花びらのように 】

予行練習の初め、永吉会長は学生たちにこう語りました。「予行練習に向かう途中、毎年オランダ坂の脇に咲くハクモクレンを見て、活水の卒業シーズンを感ずるのよ。」その言葉が心に残っていた筆者は、帰り道にふと空を見上げました。オランダ坂のハクモクレンの白く大きな花びらが、まるでガウンの襟のようにきれいに

重なって見えたのです。今年も伝統の「魂譲り(たまゆずり)」が行われ、卒業生から「白」と「夕日色(ゆうひいろ)」のリボンが手桶に結び加えられました。

### 【 リボンに願いを込めて 】

白色のリボン「どこまでも広がる白いキャンバスに、それぞれの夢や願いをのびのびと描いていけるように」

夕日色のリボン「どんな時でも夕日のような温かさが皆を包んでくれるように」

ガウンを身にまとった卒業生たちは、どのような想いでチャペルをマーチングした

のでしょうか。いつの日か、その答えを聞かせてください。

前学生生活支援課長 三浦秀成



## 父母会奨学金を活用した学生たちの感謝のメッセージ

※氏名は仮名表記しています

### 子ども学科 25年3月卒業 大垣 瑞希

この度は、父母会奨学金を給付いただき、誠にありがとうございました。奨学金は授業料や教材費に充て、生活費の不安なく学業に取り組むことができました。教材のほか、保育に関する専門書も購入でき、学びを深める大きな助けとなりました。加えて、アルバイトの時間を減らせたことで、卒業論文や試験勉強にも集中でき、論文は無事に完成し発表会も終えることができました。定期試験も順調で

卒業が目前となっています。4月までの期間は、さらに学修を深めるとともに、ピアノや手遊びのレパートリーを増やす努力を続けたいと考えています。保育園でのアルバイトでは、実践的な知識や経験を積み、専門性を高めていきたいです。いただいた支援への感謝を胸に、4月からの新しい生活に向けて全力で取り組み、成長を続けてまいります。

### 食生活健康学科 3年 的形 灯里

給付いただいた奨学金を主に学費の支払いに充てました。経済的負担が軽減されたことで精神的にも余裕が生まれ、アルバイトの時間を減らして学業に集中できる環境が整いました。毎日欠席せずに通学し、課題や講義の復習にも積極的に取り組んだ結果、2年前期の試験では1年後期より良い成績を収めることができました。後期もこの調子で取り組みたいと考えています。将来は、子どもたちに

食事の大切さや楽しさを伝える管理栄養士として働くことが目標です。3年次には給食実習、4年次には病院実習や国家試験が控えているため、これまでの学びを振り返りつつ、過去問にも取り組み、実務に役立つ知識と技術を磨いていきたいと思っております。奨学金のおかげで、目標に向けた学びを着実に進められています。今後も日々の勉学を大切にし、夢の実現に向けて努力を重ねてまいります。

### 国際文化学科 2年 別府 遥

父母会奨学金に採用していただき、誠にありがとうございました。いただいた奨学金は、学費および短期留学費用の一部に充てさせていただきました。以前から留学に関心がありましたが、費用面の不安から実現は難しいと感じていました。今回の奨学金によってその目標を達成でき、大変感謝しております。また、授業や課題、アルバイトの両立に悩んでいましたが、奨学金のおかげでアルバイト時間

を減らし、学業や語学の検定の勉強に集中することができました。これは支援があってこそ得られた貴重な機会です。学びたいこと、体験したいことを実現でき、大学生活も学業・人間関係両面で充実しています。こうした経験を今後の学生生活にも活かしていきたいです。支援して下さった皆さまへの感謝の気持ちを忘れず、今後も学業に励み、有意義な大学生活を送りたいと思っております。

### 生活デザイン学科 2年 高砂 絵里香

父母会奨学金をいただいたおかげで、充実した大学生活を送ることができています。私はひとり親家庭で、自宅から大学まで長時間かけて通学しています。またアルバイトもしていますが、その収入にも限りがあり、学費や交通費の負担が大きく、勉学に集中できるか不安を感じていました。そのような中、父母会が提供くださる給付奨学金の存在を知り、少しでも母の負担を軽減できればと思い申請し

ました。採用いただいた奨学金は、学費や交通費をはじめ、さまざまな面で活用させていただきました。ご支援により不安が軽減され、学業に専念する環境が整い、将来の進路についても前向きに考えられるようになりました。2年次からは専門的な知識や技術をさらに深め、大学での学びを社会に活かせるよう努めてまいります。このような環境を支えていただいたことに心より感謝申し上げます。

平和の種をまき続ける 中村涼香さんの挑戦

## 渋谷の空にキノコ雲、核の脅威を身近に感じる

活水中高で平和への思いを育んだ中村さんは、大学進学後もその情熱を絶やすことなく活動を続けている。彼女の挑戦は、多くの人々の心に響き、希望という名の光を静かに紡ぎ出している。



### 中学時代に芽生えた思い

平和への関心が芽生えたのは中学生のころ。毎朝の礼拝で聞いた先輩や先生方の活動の話に心を打たれ、「私も誰かの役に立ちたい」と強く思うようになった。高校進学後は迷わず平和学習部へ入部。「入部当初の高揚感は今も忘れません。国内外で活躍する先輩たちの姿に憧れ、自分にもできることがあると信じていました」と振り返る。

### オスロで見つけた“つながる政治”

人生を大きく変えたのは、高校生平和大使として訪れたノルウェー・オスロでの経験だった。ノーベル平和賞授賞式の舞台である市庁舎を訪問し、市長マリアンネ・ボルゲン氏との対話の機会を得た。「まるで隣人のように、温かく迎えてくださったことが印象的でした。彼女の言葉には、市民の生活に

根ざした政治のあり方がにじんでいました。政治は誰のためにあるのかという問いに、改めて向き合うきっかけとなりました。」長年、核兵器廃絶や紛争解決に取り組んできた市長の言葉は、心に深く残った。「市民一人ひとりが平和の担い手であるという思いが、私の信念をより強くしてくれました」と語る。この経験が羅針盤となり、上智大学へと進学。国内外での交流を通じて、学びを広げていった。

### ARで伝える「いま」の核の脅威

大学時代、AR(拡張現実)を活用したプロジェクト「渋谷の空にキノコ雲を」を企画。デジタル技術を用いて核兵器の恐ろしさを可視化することで、若い世代に問題意識を呼び起こした。「被爆の実相を伝えるには、資料館を訪れるのが一番。でも、デジタル技術を使えば、もっと多くの人に届けられると考えました」。このプロジェクトは、核兵器を「過去の負の遺産」ではなく「現在の課題」として捉え直すきっかけを社会に投げかけた。

### 平和を“仕組み”で広げるために

2025年1月、社会課題の解決を事業化する「ボーダレスジャパン」に入社、新規事業の立ち上げに挑む。「平和活動は、ときに孤独に見えるかもしれませんが、でも、共感してくれる人や支えてくれる人がいるからこそ続けられる。より多くの人に関われる“仕組み”を事業としてつくっていきたい」。平和への思いを社会の中で循環させる「かたち」にする。それが次の挑戦である。

### 先輩たちへ——信じる一步が道をひらく

「活水で過ごした日々は、私の原点。自分の興味や情熱に素直になって、一步を踏み出す勇気を持てば、思いがけない未来が待っていることを知りました」。そのまなざしは、まっすぐに未来を見つめている。小さな一步がやがて大きな波を起こし、世界に届くことを私たちに教えてくれる。静かな情熱は、これからも多くの人々に希望と力を届けていこう。



中村 涼香さん

活水中、高2019年卒  
上智大学2024年卒

人生の先輩に聞く

## my memory

### 【祈りと感謝をともに】

元活水女子大学文学部英文学科教授

中条愛子

高月麗子

私たち二人は、活水学院の歴史のなかで、多くの生徒・学生を送り出しながら、英米文学研究者としても歩んできました。活水での教育は、単なる知識の伝授ではなく、「人間愛」を育むものであり、その信念のもとに教壇に立ち続けました。

**中条愛子**：若き日カナダ・トロント大学へ留学したのは、まさに天命。メソジスト教会派遣学生として、わずか500ドルを持ち旅立ちました。異国の地では、学問だけでなく、文化の違いを超えて人と関わることの大切さを学びました。その後、コロンビア大学大学院へ進み、学位を取得しました。ある日、ニューヨークの学生寮で日本の政治家が暗殺されたというニュース



▲高月麗子先生

▲中条愛子先生

が流れました。遠く離れた祖国で起きた出来事に深い衝撃を受けました。「言葉を通じて世界を知る」「異文化を理解する」——これが教育者としての私の使命なのだと感じた瞬間でした。

**高月麗子**：働きながら九州大学英文科へ進学し、ロバート・ブラウニングの詩に魅了され、その研究

に没頭しました。言語と文学を深く探求するなかで、英語をただの言葉ではなく、人の感情や思想を表現する力として教えたいと思うようになりました。活水学院が日本のどこの学校とも異なることは、「活ける水を注ぐ人間愛教育」を理念としていることです。在職中も引退後もずっと「汝の敵を愛せよ」と

いう言葉を大切にしてきました。この教えは、多様性・公正性・包摂性と深く結びついています。あなたの敵とは誰でしょう？それは私たち自身かもしれません。怠惰、嫉妬、恐れ、怒り——これらが、成長を妨げる最大の敵なのかもしれません。

### 活水の未来へ

時代の流れのなかで、活水の伝統も変化を

迫られました。しかし、伝統とはただ受け継ぐものではなく、その意味を問い、次世代に活かすものです。これからも、「祈りと感謝」を胸に、活水学院が未来へ歩み続けることを願っています。活水生たちが、この思いを胸に世界へ羽ばたいていくことを信じています。活水は、私たちの誇りです。

## 祈りに始まり、愛に生きる —— 支え合いの心で歩む旅

### A Journey Rooted in Prayer: Toward a Life of Love and Stewardship

2025年度の学院聖句は、祈りを通して、他者や世界に心を向けることの大切さを私たちに語りかけています。創世記には、神が人間に、自然とすべての命を大切に、育てる責任(スチュワードシップ)を託されたと記されています。この物語を読み解く中で、私たちは「支える」という行為が決して孤立の中では成り立たず、人と人との協働の中にこそ、その本質があることに気づかされます。困難なときにこそ、私たちは互いに手を差し伸べ、そこに学びが生まれ、責任と信頼が育まれていきます。

導く立場にある者ほど、知恵を必要とします。そして私たちは、真の知恵は私たち自身の内ではなく、神から与えられるものと信じています。だからこそ、祈りは習慣や儀式ではなく、互いに仕え、支え合うための力の源なのです。活水学院は、146年にわたる信仰の歩みに支えられながら、これからも感謝と希望を胸に、与えられた使命を誠実に果たしてまいります。

学院宣教師 カレン・ストライダム



二〇二五年度 活水学院聖句

願いと祈りと執り成しと感謝と  
すべての人々のためにささげなさい

(テモテへの手紙 I 二章一節)



## 光の子として

私の信仰について話す機会をいただき感謝いたします。大村のカトリック系幼稚園で、初めて神様と出会いました。中学時代再び園を訪れたとき、久しぶりにお祈りし、心が洗われ涙があふれました。その経験をきっかけにミッション系の鎮西学院高校へ進学、高3のときに受洗しました。

今回、「光の子として」というタイトルを選びましたのは、受洗の報告をした際、教会のお仲間「やっと光の子になれるのね」と言ってくれたことが心に残っているからです。聖書には「あなた方は、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。光の子として歩みなさい」(エフェソ5:8)とあります。イエス様は世の光であり、私たちはその光に照らされて生きる存在です。

中高時代は保健室登校を経験。特に高2の頃は心身に不調をきたし、動悸や脱毛、震えなどが続きました。誰も信じられなくなった中で、神様だけは決して裏切らないという確信が支えました。どんなに落ち込んでも神様の存在を信じられたことが、生き続ける力となっています。それでも、自分の人生を否定されるような言葉に傷つくことがあります。それでも私は「ポジティブクリスチャン」。困難は神様が与えた試練、私を成長させようとしているのだと受け止めています。大村教会の兄弟姉妹に支えられ、前向きに信仰を続けています。今の言葉でいえば、私の信仰生活は、「推し活」や「ロールモデル」のようなもの。イエス様の生き方に学び、讃美歌を歌い、赦しを実践する日々です。

看護学部看護学科 2年 松葉瀬亜紀

幼い頃看護師を志し、中学で訪問看護の役を知って以来、坂の多い長崎で役に立ちたいと願っています。特にホスピスや緩和ケアに関心があり、「終わり良ければすべてよし」という思いが原点。特別な才能はなくてもイエス様への深い愛と信仰があります。そして、活水で学ぶことができること、神様に見つけてもらった私は、これからは人に与えられる存在になりたいと願っています。

最後にお祈りします。神様、光であるイエス様と共に歩めることに感謝します。どうか一人でも苦しむ人々に御手を差し伸べてください。私たち学生、先生方、すべての方をお守りください。イエス様の御名によって祈ります。アーメン

2024年11月12日 チャペルアワーにて

## 藤田日記

『藤田日記』は、戦時下におけるミッションスクール——地方における女子教育の実態と葛藤——を克明に描き出した第一級の歴史資料として高い価値を持ちます。東洋英和女学校での勤務を経て、1930年に活水女学校教頭として着任した藤田静雄は、1956年の退任まで26年間にわたり、戦前・戦中・戦後を通して学校運営と教育実践に献身。国家による宗教統制や皇民化教育が強まるなか、ミッションスクールは制度的・精神的に大きな圧力を受けました。藤田の教務日誌(『藤田日記』)には、

活水がキリスト教的信念を保ちつつ、国家政策にいかに対応しながら、生徒の信仰と人格形成を守ろうとしたか、その日々の葛藤と教育的思慮が詳細に記されています。信仰と教育の両立という理想を、日本におけるミッションスクールの揺籃の地・長崎で追求したその歩みは、戦時下の女子教育を考えるうえで欠かせない重要な資料です。



▲藤田静雄 教頭

▲岡部珪蔵 校長



1930年～1931年頃 左：トーマス館南側(英文科教室) 右：活水女子学校校舎

Kwassui History — vol.7

## 東山手の丘に息づく ミッションスクール建築の名作

風景に溶け込む赤い屋根と白いファサード。その美しい姿が印象的な「活水本館」は、1926年に竣工した洋風4階建ての建築。設計を手がけたのは、アメリカ人建築家ジョシュア・ヴォーゲルとヘレン・ホルスター夫妻。大正初期に来日し、ヴォーリズ建築事務所で研鑽を積んだのち、長崎、東京、上海などで活動を展開。活水本館をはじめ、明治学院礼拝堂や青山学院間島記念館など、国内に多くのキリスト教系学校建築を設計している。なかでも活水本館は、その優美な佇まいから、日本のミッションスクール建築を象徴する代表作とされている。



東山手キャンパス本館南側